

性同一性障害 山口の女性

職場で告白…命絶つ

「この先、女として生きるのも、男として生きるのも、生きづらいのには変わりがない」。山口県岩国市で1月、性同一性障害の女性20歳が自ら命を絶つた。

絶反応を示され、解雇されて以降は抜け殻のように。胸をつかみ、顔をゆがめて「この体が嫌なんよ」と、泣いた。遺族は、不当な解雇が自殺の原因として、勤務先などに損害賠償を求め提訴。山口地裁岩国支部の訴

子どもころから、ままごとや縫いぐるみよりも、少年漫画や車のおもちゃが好きだった。成長期に乳房がふくらみ、生理がくるのが苦しかった。当たり前のように暮らす同年代の男性がうらやましかった。大学卒業後、家業の手伝いをしていた。2007年4月、地

遺族によると、「障害を恥とは思わない」と言い、仕事に生きがいを感じていた。しかし、障害を知った女性の同僚らに拒

め提訴。山口地裁岩国支部の訴えを通じ、「目に見えない」障害を周囲に理解してもらえなかった女性の苦悩と向き合う。

元の中古車販売会社に就職すると仕事に熱中。「人生で一番充実した時間」を迎えた。自分の居場所を見つけた、と思った。

性同一性障害 自分が考える心理的な性別と、肉体的な性別が食い違う障害。当事者は不一致に苦しみ、心の性に従い日常生活を送ることを望む。原因は判明していないが、胎児期のホルモン異常などが指摘されている。国内には1

万人以上いると推測されているが、詳しい実態は分かっていない。性同一性障害特例法では①20歳以上②未婚③未成年の子どもがいないなどの条件を満たした人が、家裁に性別変更の審判を請求できる、と規定している。

アングル

「解雇が原因」遺族は提訴

その一方、職場が楽しくなるほど、同僚に内面が男であることを隠しているのが苦しく感じるようになった。葛藤に耐えられずに会社内でリストカットした傷を見られたことをきっかけに、昨年11月、信頼する同僚に性同一性障害を告白した。

品物の返却を求めたが、処分された後だった。面影を探し続ける日々。いまでも女性が好きだった食べ物を見ると、その場にいられないような苦しい気分が襲われる。「人間性は同じなのに、『心が男』と言うと態度が変わるのはおかしい。周りの人が娘のありのままを受け入れていてくれれば…」

だがそれを機に同僚の態度は一変。しばらくして「(リストカットで)社員に恐怖を与えたことを理由に解雇された。女性地位保全の申し立てをしたが、家族の目からも明らかに気が落ちた様子に。このころ「やりがいを失うのは生きる意味を失うのと同じ」と絶望的な思いを文章につづっていた。

女性の死後、母親は会社に遺提訴は今年4月。訴訟で会社側は、「自殺と解雇は無関係」「性同一性障害への差別心からの解雇ではない」と争う姿勢を示し、双方の主張は平行線をたどっている。会社は「訴訟中なので、コメントを差し控えたい」としている。